ソ連極東の地学関係研究機関

野沢　保（地質部）・青木　斌（東海大学海洋学部）

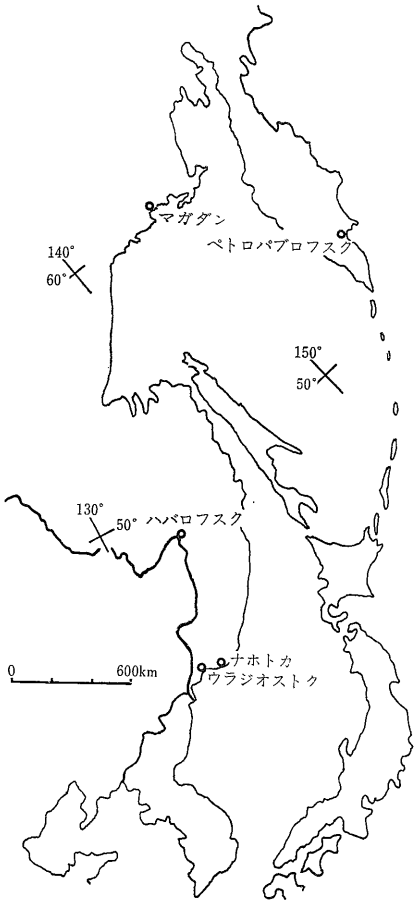
まえがき

本誌の学会掲示板に案内がのつているように（№288）第14回太平洋学術会議が来年8月ハバロフスクで開催される（第1　2　3図）．　そのサーキュラーは3月末に日本へついた．　よく読むと参加申込みの〆切は3月1日とあった．

ソ連は私たち日本の地学関係者にとって魅力のある国である．　それなのに私たちにはいくら国柄がちがうからといつても　なぜこんなことになるのかわからないということが実に多い．　来夏ハバロフスクへでかける日本の地学関係者も少なくないであろう．　ソ連事情はモスクワをはなれるとさらにわかりにくい．

筆者たちは　1976年秋　サハリンで開かれた日ソシンポジウムに参加した．　その時　心がけて日本に近い極東の地学関係機関についてきいてまわった．　その不充分な情報をつないで　これらの機関を紹介してみたい．私たちは　この時　ソ連極東の一端を短時日かいまみたにすぎない．　見当ちがいもあるかもしれない．　おゆるしねがいたい．

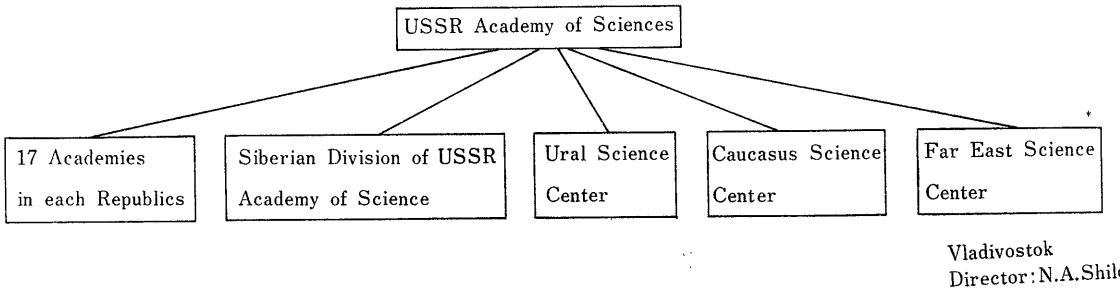
筆者たちのわずかな交流を通じても　ソ連極東の地学



第1図　ソ連極東概略図

第3図
ハバロフスク市街　1976
市の創設者ハバロフの像　横山泉教授　ミニの娘達

第2図　ハバロフスク駅　1976
ハバロフスク市　人口50万　シベリア鉄道の駅も富山位．　日本でソ連では駅や鉄道は撮影禁止だと注意されていた．　さかんに写真をとっているソ連人がいた．　"いいのか"ときいたら"知らない"という返事だった．それでおそるおそる一枚．



*
Far East Science Center

Vladivostok
1. Far East Geological Institute** (Director: V.G.Moiseenko)
2. Institute of Marine Biology
3. Institute of Biology and Pedology
4. Oceanology
5. Institute of Chemistry
6. Institute of History & Archeology of the People of the Far East
7. Institute of Bio-organic Chemistry
8. Department of Economy
9. Department of Marine Survey
10. Institute of Automatics with a Computer Center

Khabarovsk
1. Institute of Tectonics and Geophysics (Director: Yu.A.Kosygin)
2. Khabarovsk Complex Scientific Research Institute
3. Computer Center

Sakhalin, Yuzhno-Sakhalinsk
Sakhalin Complex Scientific Research Institute (Director: K.F.Sergeev)

Kamtchatka, Petropavrovsk
Institute of volcanology (Director: S.A.Fedotov)

Magadan
Northeast Complex Scientific Research Institute (Director: N.A.Shilo(?))

**
Far East Geological Institute

1. Petrography
2. Stratigraphy
3. Geochemistry
4. Lithology
5. Physico-chemical investigation
6. Paleomagnetism
7. Metallogeny
8. Ore deposits

ソ連極東地域研究機関機構概略

研究者たちの日本との交流への熱意は肌に感じられるものがあった．　言葉の障壁は大きい．　英語がよく通じないのでなおさらである．　それでも　これらの機関の研究者たちの率直な友情は忘れがたいものがあった．

この紹介が来夏ソ連を訪れる地学関係者のソ連理解の一助にでもなれば幸である．

極　東　の　機　関

ソ連の全地学者人口は20万という．　極東に何万であろうか．　サハリンで　その組織を知りたいが公表された資料はないか　ときいたら　"知らない"という．

それでも大よそのところをきいて　別表のような組織図ができた（上掲の表）．　帰国後来日したソ連地学関係者にきいたらこんなものだろうという．

全ソ連の地学研究の中心は　勿論モスクワの科学アカデミーである．　科学アカデミーは極東に4つの大きな Branch と Center をおいている．　その一つが Far East Science Center で　日本の地学関係者が接触しそうな極東の機関はほとんどこのなかにふくまれる．

Far East Science Center は極東最大の都市 Vladivostok におかれ　自然・人文両科学のいくつかの専門分野をもった総合施設がある．　その他に Khabarovsk, Sakhalin および Magadan に総合科学研究所をもち　Kamchatka には火山専門の研究所をつくっている．

Sakhalin の総合科学研究所は海洋に力をそそいでいるので日本ともなじみが深い（第7　8図）．　ここの海洋調査船ペガスは東京へも度々寄港している．　この研究所は　総員約800名　内科学者約250名　年間総予算約500万ルーブルという．

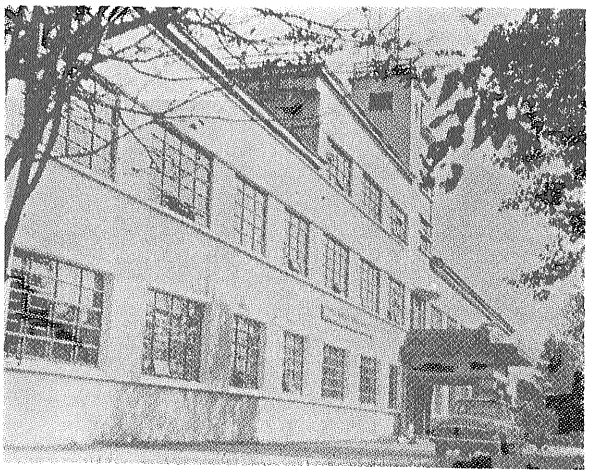
Vladivostok の Far East Geological Institute は　規模は Sakhalin と同じ位であるが　ここには岩石学者が多い．　ここでは古生物学は Geology に入らないで Biology に入っているそうである（第9　10図）．

Institute of Volcanology は Petropavrovsk にある世

第4図 Prof. N. A. SHILO ホルムスクのレストランで 1976
アカデミシアン 最近マガダン Northeast Complex Scientific Research Institute 所長から Prof. KAPITSA の後をおそって Far East Science Center の所長になった。 鉱床地質学 度々来日し 知人も多い。
写真のレストランの銀食器は豪華だった。 SHILOがフォークを記念にもってかえるといって胸のポケットにさした。 同席した私達がおどろいて ウェイトレスにことわるようすすめた。よびとめられたウェイトレスは困った顔をしてすっこんだ。
かわりに目のさめるように美しい少し年かさの婦人があらわれて SHILOの名刺をみて にこやかにフォークをプレゼントした。 SHILOは婦人の手にロづけをした。 "アカデミシアン"はこの国でどんなに広く国民の敬愛をうけていることか

第5図 Prof. Yu. A. KOSYGIN ツナイカ湖畔で 1976
左端 Prof. KOSYGIN その手前 Prof. SERGEEV 右端青木 斌教授。 Prof. KOSYGIN はアカデミシアン 地球物理学 ハバロフスクの Institute of Tectonics and Geophysics の所長。

第6図
Prof. K. F. SERGEEV
1976
最近 Prof. SOLOVIEV と交代して Sakhalin Complex Scientific Institute の所長になった。 火山構造学



第7図 Sakhalin Complex Scientific Research Institute
旧日本政府の農林省林業試験場の建物を 内部も外装もほとんど改造されないままで使用している。

第8図
Prof. V. G. MOISEENKO と Dr. GNIBIDENKO 夫妻 1976 中央が Prof. MOISEENKO ウラジオストックの Far East Geological Institute 所長。 鉱床地質学 来日し地質調査所を訪れたことがあり 日本の地質調査所と文献や岩石・鉱物試料の交換をすすめている。
右端 Dr. H. S. GNIBIDENKO, Sakhalin Complex Res. Inst., 構造地質学 日本になじみが深い。この年彼は渡米し ソ連モダンボーイズのあこがれジーンズを買ってかえった。 日ソシンポジウムではヨーロッパ風の荘重な服装のソ連人の中にまじってひとりジーンズで得意そうだった。 英語がうまい。
左端 GNIBIDENKO 夫人 TANYA BYKOBA ソ連では結婚しても名前をかえなくてもよい。 日本人にはめんどうな話。 構造地質学 GNIBIDENKOの助手 昨年ペガス号で東京を訪れた。

第9図
Dr. K. GALYNA と Prof. A. M. SMIRNOV 1976
第3回目ソシンポジウム (1976) は ソ連共産党サハリン州委員会政治教育館で開かれた. 建物の一方の外壁はレーニンの肖像だった. その前で 左側 Dr. GALYNA ハバロフスク Institute of Tectonics and Geophysics. sheet mapping geologist だという. 右側は Prof. SMIRNOV ウラジオストック Far East Geological Institute 構造地質学 最近 環太平洋地域の Precambrian map を編輯した.

第10図 ウラジオストック Far East Geological Institute の人達 1976
左から Dr. I. A. TARARIN 岩石学 Prof. MOISEENKO Mrs. L. KOVBAS 英語通訳 Prof. SMIRNOV, Dr. M. A. MISHKIN 変成岩 Dr. SAKHNO 火山学 ウラジオストックには岩石学者が多い.

第11図 Prof. FEDOTOV と午来さん 1978 (GDP)
アカデミー準会員 火山学 パトロパブロフスクの Institute of Volcanology 所長. 英語がうまい.

第12図 研究業績星取り表 Sakhalin Complex Sci. Res. Inst. 1976
業績主義はプラグマティズムだ アメリカニズムだという批判は日本でよくきく. ソ連人は"体制"をのぞくとアメリカ人に 共通点が多いとあるアメリカ人が教えてくれた. Sakhalin Inst. の図書室に全研究者の過去3年間の公刊された業績表がはり出してあった.

界有数の火山研究所で　A—地質学・火山学　B—地球物理学　C—地熱学・地球化学の3部門がある（第11図）．Aには5研究室があり　Y. M. Abdeiko の海底火山研究室は有名である．　Bには5研究室があり　その一つに P. I. Tokarev の地震火山予知研究室があり　1975－6 の Tolbachik 火山の噴火予知で名をあげた．　Cにも4研究室がある．　研究所は総員538名　内科学者約130名である．

別表をながめるとわかるように　これらの科学研究機関の重要なポストはほとんど地学関係者が占めている．Far East Science Center の director は有名な地質学者 N. A. Shilo であるし　Kamchatka の Inst. Volcanology や Khabarovsk の Inst. Tectonics and Geophysics の director はいうにおよばず　Sakhalin の総合研究所長も地質学者　つい先日まで Shilo が所長をしていた Macadan の総合研究所長も　後任がどうなったか知らないが　地質学者があとをおそったのではなかろうか．　とにかく　この国とくに極東での地学のしめる地位の高さが推定されるところである．

中央と地方

私たちは　ソ連極東の地学関係者とは　とかく　接触がうすい．　ソ連地学者でよく来日したり　国際会議で顔をあわせたりする人は　モスクワ関係が多い．　極東の機関にいても Prof. Shilo とや Prof. Fedotov などよく出てくる人達がいる．　しかし　これらの人たちはそれぞれアカデミー会員とか準会員とかで　極東にいても中央の人なのである．　国際交流に中央の人が活躍するのは　避地問題ではなくて　ソ連がヨーロッパ型の中年社会だからかもしれない．　ソ連では中年や初老が力をもっていて　若者はそのかげにかくれがちである．日本やアメリカの若者が猛烈ないきおいで年寄をおしのけて発言しているところをみたら　ソ連の若者は肝をつぶすだろう．　モスクワがソ連を代表する傾向があるのは　中年以後の実力者がとかく中央に集中しやすいという意味での中央集権の結果かもしれない．

学風にも中央と地方があるようにみえる．　1976年の日ソシンポジウムでは　さすがに極東の地学者が主役だった．　彼等の指導者層は公然といっていた．　"Anti-plate is our slogan"．　plate にのろうものならはじき出されそうであった．　ところが今春　東京で開かれた Geodynamic Project の国際集会にきたソ連中央の人には　海洋底拡大論者がいた．　モスクワでは少数派ではないという．　中央と地方と自由度がちがうのか　国際社会への開かれ方のちがいなのか　また　日ソシンポジウムで寄異に感じたことの一つは　トップクラスをのぞくと　極東の四大研究機関の地学者たちの横のつながりはきわめてわるいらしいことである．　食事やレセプションでも機関毎にかたまっていた．　理由の一つになりそうなのはわかる．　ソ連には単一の〝地質学会〟がない．　極東だけの地方学会もない．　そういう〝横わり〟の機能はモスクワのアカデミーがはたす．　アカデミーはそれぞれのテーマ　プロジェクト毎に委員会を組織する．　だから〝横わり〟の組織があるといっても　本来〝たてわり〟なのである．　研究体制においても　中央集権的というべき国なのであろうか．

～地質調査所の出版物～

・地質調査所月報　第29巻　第4号

Fujii, N., Sudo, S. and Kuriyama, M.: An Outline of Expanded Shale Resources in Japan.

宇野沢昭：福井県小浜平野の第四紀層の ^{14}C 年代と花粉分析結果について

尾崎次男：三重県四日市市における地下水位の観測結果

地質調査所編集委員会：国際単位系（SI）について

岸本文男訳：1975年カムチャッカ半島トルバチーク火山噴火関係論文　（5編）

・地質調査所月報　第29巻　第5号

Yoshii, M.: Geology and Manganese Deposits of the Kunohe Area, North Kitakami Mountains.

東元定雄・佐田公好：山口県東部に分布する玖珂層群中の含紡錘虫石灰岩礫岩について

研究発表会　講演要旨

・地質調査所月報　第29巻　第6号

牧　真一・永田松三：島根県下の新第三系堆積岩中の有機物について

渡辺暉夫・坂本正夫・湯浅真人・片田正人：長野県南部遠山地方　秩父帯の三畳紀緑色岩中のケルスート閃石

寺島　滋：原子吸光法によるマンガンノジュール中の Mn, Fe, Cu, Ni, Co, Pb, Zn, Si, Al, Ca, Mg, Na, K, Ti, Sr の定量

石山尚珍：津軽平野の湖沼群に生息する貝類とその環境について

100万分の1日本地質図編纂委員会：100万分の1日本地質図（第2版）編さんに関する若干の覚え書